

## いかに『ブラック・ライヴズ・マターから学ぶ』か

### How Can We *Learn from Black Lives Matter*

小美濃 彰  
OMINO Akira

東京外国語大学大学院博士後期課程  
Tokyo University of Foreign Studies, Doctoral Student

#### キーワード

ブラック・ライヴズ・マター ブラック・パワー 山谷

#### Keywords

Black Lives Matter; Black Power; Sanya

*Quadrante*, No.25 (2023), pp.21–28.

小美濃彰と申します。私は東京外大の大学院博士後期課程で歴史学を専攻していて、日雇い労働者の労働市場や場合により簡易宿所の密集地域としても知られる「寄せ場」をめぐる地域社会史を、目下のところは東京・山谷についての研究をしています。その作業のなかで注目しているのは1960年代の「さんや同人」という集団による、いわゆる「日雇労働運動」といって想起されるようなイメージとは異なるところもある、青空保育なども含めて構成されていた運動の展開です。

今回の合評会をひらくにあたってお声がけをいただいたときには、だれか日本社会研究から出てくる院生がいないかという趣旨もお聞きしていました。そういうことで、自分自身の関心に引きつけすぎるところがあるかもしれませんが、この武内進一・中山智香子(編)『ブラック・ライヴズ・マターから学ぶ』(東京外国語大学出版会、2022年)を通読してみて頭のなかに浮かんで動くようになった問題意識を、率直に述べさせていただきたいと思います。

\* \* \*

本書は、2021年10月から2022年1月にかけて計11回(9回+2回のスピンオフ)にわたる連続セミナー「Black Lives Matter 運動から学ぶこと——多文化共生、サステナビリティについて考えるために——」(東京外国語大学多文化共生研究創生WG)を背景にもち、これにたずさわってこられた方々の論考から構成されていて、本書とセミナーとの関係は編者による「はじめに」で触れられています。

まず序章「ブラック・ライヴズ・マターから学ぶ」(武内進一氏)で、世界の様々な場所に生じたブラック・ライヴズ・マター(以下、BLM)との共鳴を「植民地主義の展開と批判」の歴史をふまえて捉えようとする視座が提示されます。そして第1部「基本をおさえる」、第2部「アメリカ社会に踏み込む」、第3部「自分の足元を見つめる」、第4部「世界への広がりをまなぐす」というように視点と視野を変化させた各部にそれぞれの論考が配置されています。そうしてさまざまに思考をめぐらせながら、終章『黒』を



軸に立てる」(中山智香子氏)は黒人として生きることの身体的な固有性を、それがBLMをめぐる読者の思考から抜け落ちることのないよう提示しています。

はじめからおわりに向かって読んでいくと、この終章に続いて「おわりに：私たちのなかのBLM」(中山俊秀氏)へと進むことになります。このなかに「BLM運動が浮き上がらせているのは、人種差別的な思想・態度を持った人々の攻撃的行動といった単純な問題にとどまらない。格差、移民、経済社会的地位の没落など、グローバル化した現代社会の問題が多層的に絡んだ複雑な状況のあらわれであり、これらは日本社会での問題でもある」(372頁)という指摘があります。BLMのメッセージがもつ固有性をそれ自体に即してつかもうとすることが不可欠でありながら、その過程で日本社会をめぐる問題も同時に意識しなければいけないことも事実です。そうした同時で多重な思考のあり方がここに、あるいはこの『ブラック・ライヴズ・マターから学ぶ』という書物の全体にはっきりと現わされているように思います。

そうして各論考を支えている思考の文脈が幾重にも交差しているわけですが、なかでも本書がアフリカ研究の蓄積をひとつの基礎にしようとしていることは重要なことだと感じました。BLM運動に触発された植民地主義見直しの動きをヨーロッパにおいて見ることができるが、それがアフリカ諸国からどのように見られているかという地域固有の文脈に根差した問いについては十分に触れることができていない、ということわりはあります。とはいえ、1960年代のブラック・パワー運動における思想的な根拠のひとつがアジア・アフリカにおける反植民地闘争であったことを思い起こしてみると、これは本書の特色となる重要な視角なのではないかと感じました。

そのように全体像をふまえたうえで、もう少し

具体的に、私が本書を読んだあとに抱いた考えについてまずは大まかに触れてみたいのですが、これはとても粗っぽい話になってしまうなどと思っています。というのも、BLM運動が触発した植民地主義見直しという世界的な規模の動きまで視野の広がりをもたせながら、同時に「自分の足もとを見つめる」という題がつけられたところにマイクロアグレッションをめぐる議論が収められているのですが、これを具体的にどう受けとればいいのかと悩んでしまったところがあります。日常のなかで微細な網目のように広がっている権力関係において再生産されている差別に向き合うということは、「自分の足もとを見つめる」といえば身近に感じるところがある一方、すごく大きな話でもあるがゆえに、かえって反差別闘争のつかみどころが分からなくなってしまうような印象があります。そのようなことを考えながら、最後のほうで1960年代の山谷解放運動とブラック・パワー運動との交流について言及してみるつもりです。

\* \* \*

まず全体に触れておこうと思って前置きが長くなっていますが、はじめからおわりに向かって読み進めていけばBLM運動の内部がこまかに分かっていくという、この本がそういう理解の深まりを想定したものなのではないと感じています。はじめに黒人自由闘争をめぐる通史的な記述があって各論に入っていくというつくり方ではなく、各々の論者がそれぞれのアプローチをもって叙述をおこなっているのも、まさにどこから読んでもいいという構成になっているのではないのでしょうか。BLM運動をめぐるはいくつもの書籍が先立って刊行されてきたこともふまえてのことだとも思いますが、本書の重点はちがうところにあるような印象があります。

本書のいくつかの論考のなかでも触れられ

ていますが、BLM 運動の拡大は白人／黒人間の人種差別という単一のカテゴリーに着目しては浮かびあがってこなかった問題を、ジェンダーやセクシュアリティというカテゴリーも重ね合わせることで浮上させ、運動の領野そのものを広げたというところにひとつの根拠がありました。ただ、「アメリカからグローバル世界へ」というサブタイトルをもつ本書は、BLM 運動の世界的な広がりや世界各地における植民地主義見直しの動きとの関係というレベルで捉えようという姿勢を強調しているところが特徴のひとつなのではないかなと思っています。

序章において武内進一氏は BLM 運動に三つの側面があると思うと述べています。第一に「被害者による加害者に対する告発」という側面。第二に「歴史に対して目を向けそこから学ぶことを促す」という側面。それから第三に「未来について考えることを私たちに促す」という側面。こうした側面を併せ持つ BLM 運動が、人種主義と結びついた植民地主義の見直し、すなわち「過去の過ちを認め、それを乗り越えて、どのような未来を切り拓くことができるのか」という問題を、日本をふくむ世界各地で浮上させているのだというふうに書かれています(24-25頁)。この植民地主義の見直しという動きは、第4部・第15章「植民地主義の見直し」のなかに詳しく書かれています。

この章の主題は、ヨーロッパとアフリカ諸国との間での動きになっていますけれども、重要なのは、やはり「ヨーロッパ諸国における植民地主義の見直しの動きは、BLM に触発されたり、共鳴したりしてはいても、基本的にはそれぞれ独自の歴史、アフリカ諸国との関係のなかで進んできた」という認識と、「アフリカがこうした欧米の運動をどう見ているか」という問いの答えもまた、アフリカ各国の文脈において探すしかない」という、BLM 運動の広がりを捉えるための基本的な姿勢です。世界的な波及のなかで

BLM 運動の思想や理論のエネルギーが受けとめられている一方、同じものを共有しているように見えるこの世界の各地で想起されている過去と未来の姿というのは全くバラバラでありうるという、そうした注意を喚起しているように思われました。「BLM 運動やそれに共鳴する植民地主義見直しの動きは、私たちの社会内部にある認識の違いを浮かび上がらせている」(360頁)という指摘は、BLM 運動への共鳴のなかに生成している緊張関係にも意識を向けさせます。

このように各地の歴史やその認識と複雑にからまり合いながら BLM 運動のインパクトが世界に広がっているということをふまえて、そのなかで「自分の足もとを見つめる」ということはどういう作業なのかと考えを深めていくことが求められると思うのですが、本書では、マイクロアグレッションという概念がひとつの鍵として取りあげられています。これについては第3部「自分の足もとを見つめる」のうち、第10章『差別を支えてきたもの』は何か(山内由理子氏・中山裕美氏)や続くコラム「対話の入り口に立つ」のなかで触れられています。

本当に微細な権力関係のなかで日々再生産されている、おそらく私が誰に目を向けてどうしゃべっているのかとか、そういうところのなかにも無意識のうちに現れうる差別的な振る舞いを問題化するということは重要だと思うのですが、本書のタイトルになっている『ブラック・ライヴズ・マターから学ぶ』ということを考えてみると、BLM 運動はやはり近代資本主義、帝国主義、植民地主義をめぐる歴史認識に関わることからであるわけです。そのなかで人種主義についての批判的思考をどう深めていくことができるのかが世界中で問題になっているのだと思うのですが、本書におけるマイクロアグレッションについての議論はややちがった角度に向かっているのかなと思います。



やはり「足もとを見つめる」というところで「見える差別」についての分厚い前提がないかぎり、「見えない差別」を問題にする議論の目的がよく分からなくなってしまうような気がしています。というのも、マイクロアグレッションについての議論は、差別的な言動をそれとして認識していない発し手と、それによって差別をうける受け手とのあいだで、どのような対話を構築することができるのかという問題にかかわっていると思うのですが、そのためには、なにが差別かということについての意見を交わす政治文化が社会のなかに必要だと思います（この点、本書「おわりに」にある「これまでの運動が問題の解決をいまだもたらしていないことをみてもわかるように、差別への批判・非難は差別的関係性や差別行動をなくすための対策としては効果的とはいえない」（373頁）という、参照していることがらを示さないでなされる運動の評価は承服できません）。それゆえ、とりわけこの日本社会でマイクロアグレッションの議論を導入するために必要な土台というものについても、なにか考える必要があるのではないのだろうかと思った次第です。

そういうわけで、BLM 運動が世界的に影響を及ぼしているなかで日本ではどのようなことを考えていけるのかとなると、『ブラック・ライヴズ・マターから学ぶ』ということがいかに、どのような場でなされているのかということも具体的に考えることが必要なのではないかと思います。人種主義については入管施設における被収容者の劣悪な処遇や在日朝鮮人へのヘイトクライム、沖縄における基地の集中、アイヌの遺骨返還など様々に問われ続けています。そうした問題をめぐって交わされている議論のなかでこそ差別ということの意味はより精緻に語られているはずですし、そのような闘争の場における議論の共有こそマイクロアグレッションの克服を目指すための基礎として必要なの

だろうと思います。

また、マイクロアグレッションの克服に向かうための実践は諸個人のあいだの関係性をどのようにつくることができるかという課題そのものでもあると思うのですが、それは本書においてたとえば第4章「#BLM と #MeToo：インターセクショナルリティと共生のコミュニティ」（小田原琳氏）のなかで言及されているコミュニティ・オーガナイズングに直結するものだとも思っています。マイクロアグレッションを克服するための感性というのは、そのような実践から積極的に学ぼうとしないかぎり身につけることができないのだらうと思います。また、そのためには差別をめぐる批判にみずからをひらくという姿勢が求められるということも、第3部のコラム「対話の入り口に立つ：アフリカにルーツを持つ若者とのトークイベントから」（森聡香氏・奥富彩夏氏・大石高典氏）から読みとることができると思います。

\* \* \*

さて、最後のほうに山谷解放運動とブラック・パワー運動との交流について触れるということにしましたが、それは交流の基盤にそれぞれのコミュニティがあり、またそれぞれの実践のうえに闘争の共鳴が生まれた重要な事例ではないかと、自分の研究に引きつけすぎだとも思いつつ、考えているからです。1968年8月23日の夜、山谷にある城北福祉センターという東京都の施設のなかで「山谷＝ブラックパワー連帯集会」がひらかれていて、そこにドナルド・P・ストーン（1935-2019）という学生非暴力調整委員会（SNCC）のメンバーが登壇していました。

SNCC Digital Gateway というウェブサイトにある記述によれば、ストーンはジョージア州アトランタにあるモアハウス大学を卒業してから

郵便局に勤務し、やがてアトランタで学生運動が開始されるとそこに関わることになり、1966～1968年には Atlanta Vine City Project という、アトランタでもっとも貧窮していたという黒人コミュニティのエンパワメントとオーガナイズを試みた SNCC のプロジェクトに参加していたようです。その中心的人物として活躍したストーンはベトナム反戦と兵役拒否の運動にも取りくんでいて、キューバや北朝鮮を訪ねて活動家との交流をしたあと、1969年にアメリカへ戻って逮捕されたとのことでした。

おそらく逮捕前の旅程のなかに山谷が含まれていたのだと思います。山谷解放運動にかかわっていた梶大介という人物の『山谷戦後史を生きて』下巻（績文堂、1977年）をみると、「〈反戦と変革に関する国際会議〉」に出席するために来日し、広島・長崎の原水禁大会にその勇姿を登場させ、沖縄の基地闘争に飛び出して行ったアメリカ黒人」（328頁）ということが書かれているので、ベ平連とのかかわりで来日し、まだ当時は梶大介とともに山谷解放運動にたずさわっていた竹中労のコネクションなどもひとつの要因になって、山谷を訪れたのだらうと考えられます。

というわけで、「山谷＝ブラックパワー連帯集会」に姿をあらわしたストーンは次のように語っていました。山谷解放委員会という運動体のパンフレット『解放戦線』創刊号（1968年12月）に日本語訳が収められています。引用中の傍点は原文ママです。

山谷の兄弟諸君——私は、闘うアメリカ黒人を代表して、あなたがたと連帯の握手をむすぶ機会を持ったことを、心からうれしく思っております。

私は、山谷について日本の二、三の友人から若干の予備知識を得たにすぎません。しかし、きょう、ここに来て、私は直ちに理

解することができました。それは、私たち黒人がアメリカ国内でおかれている状況と、山谷労働者の生活の間には完全な共通点がある、ということでもあります。

第一に、劣悪な生活条件であります。もしあなたがたが、アメリカ諸都市における黒人住宅街を訪問すれば、そこに無数の“山谷”を発見することができるでしょう。そして、私がここにきて見たのは、まさしく黒人街のそれと同じ様相であります。アメリカでは年収二千ドル以下の所得階層が貧民とされております。全黒人の実に60%がそれに当るのです。黒人はみじめなスラムに住み、白人社会から隔離されています。〔中略〕

第一の理解を前提において、確信するのですが、山谷労働者はもっとも抑圧され、差別された階層に属するがゆえに、アメリカ黒人と等しく、もっとも戦闘的な前衛となり得るのであります。（強い拍手）

それが第二の共通点であり、そして、もっとも重要な共通点なのであります。この夏、山谷労働者は、再三にわたって警察権力に対する抗議の行動をおこしました。ジャーナリストである日本の友人の解説によれば、山谷労働者にとって、いわゆる“暴動”をおこしてる状態こそが正常なのであって、日々の搾取と抑圧に甘んじていることのほうが異常なのだ、ということでもあります。それはアメリカ黒人についても、また等しくいえることであります。〔中略〕

第三に、私たちは、いわゆる“非暴力”にふみとどまっていたのでは、なにものも得ることができないことを知っています。黒人の権力を獲得する運動の中には、平和的訴えによって白人を改良させようという思想があります。だが、一貫してそのような立場にいた黒人教師、マルチン・ル

サー・キングは白人の暴力によって殺されました。アメリカでは、毎日のように警官のライフル銃が黒人を射殺し、法廷すら黒人に強姦のヌレギヌを着せて死刑台に送る道具になっているのです。

1968年の山谷解放運動といえば、さきほど名前を出した梶大介という当時の中心的な活動家が中国文化大革命から影響を受けたりしていて、山谷のなかにある交番に数名規模の無届デモを向かわせて蜂起を呼びかけたりしていました。そうした意図的なはたらきかけがなくとも、1960年代は日雇労働者らによる暴動が頻発していたわけですが、そうした状況がストーンの言葉に反映しています。「ジャーナリストである日本の友人」というのはおそらく竹中労のことだろうと思うのですが、その「解説」に通ずる内容が『都市反乱の原点』（全国自治研修協会、1969年）に書かれています。

暴動の背景としてはもちろん1960年代の高度経済成長があり、東京オリンピックもありましたが、寄せ場にますます多くの日雇労働者が主として建設産業に吸収されていきながら、その生活空間である山谷のようなドヤ街では地域の治安維持をになう警察の体制が整備されていた時代です。山谷では1959年に「地域環境浄化推進運動」という住民運動がはじまり、これをうけて1960年7月に「マンモス交番」と呼ばれた巨大な交番が設置されています。ドヤ街に集中する日雇労働者へと向けられた警備体制が構築されていくなかで、1960年代には暴動が続発していったわけです。ストーンはそうして都市暴動が繰りひろげられている場としての山谷を知ったということになります。ストーンは続けてこう語っています。

山谷の兄弟諸君——、あなたがたも私たち黒人と同様、勝利は血を以てしかあがな

えぬことを、敵権力、支配階級を直接うちくたく暴力の行使のみが、真の解放をもたらすものだということを、かならず、信じておられるにちがいない。（激しい拍手）

この第三の共通点が、私たちの連帯のいちばん強い環でなければなりません。アメリカ黒人解放闘争と山谷の闘いの強固な連帯は、最底辺の被圧迫人民の怒りから発して、世界革命の圧倒的な確信にまで高められなくてはならないと、私は考えます。——われわれの共通の敵は“資本主義”であり、その最強のトリデである、「アメリカ帝国主義」であります。

SNCC（学生非暴力調整委員会）という運動体は非暴力直接行動において襲撃をうけながら多くの犠牲をはらっており、そうした経験にともなう強い怒りのなかでブラック・パワー運動へと向かいつつ、暴力の行使を表明していくこととなります。ストーンによる連帯のよびかけはそうした経緯のうえにあってなされているものです。

同時代ながらも異なる地域で生じていた都市暴動が、そして山谷解放運動とブラック・パワー運動とが、革命運動をめぐる構想のなかでこうして具体的に結びつけられたことは注目すべきだとは思いますが、そのときにストーンが見いだしていた、アメリカの黒人と山谷の日雇労働者とのあいだの第一の共通点を軽く見過ごしてはいけないのだらうと思っています。それは「アメリカ諸都市における黒人住宅街を訪問すれば、そこに無数の“山谷”を発見することができるでしょう」と語られているように、隔離された劣悪な生活条件のことを指しているのですが、山谷の日雇労働者がアメリカの黒人とひとしく「もっとも戦闘的な前衛となり得る」という、第二の最も重要とされる共通点はこれを前提にしているとも言われています。



寄せ場における運動を考えると、はじめに日雇労働運動というイメージを頭においてみるとこの生活条件というのは後景化してしまいがちな気がしていますけれど、やはりどのような人びとがいかなる条件のなかで生活しているのかということ、実際に山谷にきて知ったということは、山谷で連帯を呼びかけたストーンにとって重要だったはず。それは Atlanta Vine City Project という、コミュニティに根差して運動を組みあげていこうとしたストーンの経験をふまえても、的外れではないと思います。

山谷における暴動の主体は日雇労働者が大半だったわけですが、ストーンが想起している山谷の景色のなかには、ドヤで生活している子どもたちの姿などもあったのではないだろうかと思っています。ストーンが何を思っていたのかは、もはや想像でしかないのですが、山谷では「ドヤっ子」と呼ばれていた子どもたちのために公園などをつかった保育がおこなわれていましたし、その様子はたとえば梶満里子『粒ちゃんになりたい：山谷の子らと生きる日々』（あすなろ書房、1966年）で知ることができますし、橋本照崇『山谷：1968.8.1-8.20』（禅フォトギャラリー、2017年）という写真集には、山谷のデモ行進を二階の部屋の窓から眺めている子どもたちの印象的な写真があります。

だからなんだと聞かれて、それ以上なにかを言えるかとなると現時点では厳しいところがあります。ただ、日雇労働運動のあり方について語ろうとするときには主体となる日雇労働者の流動性を認識することが重要になりますが、それと同時に、やはり、地域のなかに固有なコミュニティのありかた、あるいはコミュニティをつくりだそうとする動きも含めた、都市暴動の同時性だけで結ばれていたのでは決してない連帯の根拠を捉えることが必要なのではないかと、今回ストーンの経歴を知って考えるようになったわけです。

1960年代の山谷には子どもたちが少なからず生活を送っていて、そうした子どもたちをめぐる、報告の冒頭に名前だけ触れた「さんや同人」というグループなどの運動があったのですが、ストーンは山谷におけるそうした動きにたどり着いて接触することができたのかもしれないとも思っています。すでに触れているとおり1960年代にはいると山谷で暴動が立て続けに起こります。そうしてどのような変化が山谷で進行したかということ、ここで西澤晃彦『隠蔽された外部：都市下層のエスノグラフィー』（彩流社、1995年）を参照しますが、国家・地方自治体・警察・地域有力者・ボランティアグループなどの複合によって構成される「保護複合体」（ジャック・ドンズロ）が暴動の渦中から子どもたちを救いだそうと介入するわけです。そうしたなかでドヤ暮らしの家族世帯には東京都から公営住宅が割り当てられて山谷から引き剥がされていく。ストーンが山谷に来たころにも、そのような過程はかなり進んでいたと思います。

また西澤晃彦氏はこうした「保護複合体」の介入について、都市下層におけるコミュニティを再生産させないようにするための政策だというふうに言っていますが、ストーンが山谷との連帯を叫んだときには、それでもまだ、日雇労働者の街として純化されてはいない山谷の光景があったのだと思います。ストーンがアトランタでの運動のなかでかかわってきたコミュニティの厚みのようなものを山谷からどのように感じとっていたのかを、いま十分に根拠づけることはできないのですが、山谷解放運動とブラック・パワー運動との「共鳴」の背後には都市暴動の同時的な発生をそれぞれにおいて支えている文脈があり、そうしたものを探求していくことが必要なのだろうと考えています。

話を進めていくにつれて散漫になってしまいましたが、『ブラック・ライヴズ・マターから学

ぶ』ということで BLM 運動の力を受けとりながら日本社会でなにかを考えようとするときにももちろん「見えない差別」を問題として考えなければならない一方で、そもそも「見える差別」をめぐってどのような闘争がどのような人びとによって続けられてきたのかということをもっと考えなければ、あるいは、そうした実践の蓄積をまず肯定しながら差別という問題を考えるのではないかぎり、BLM 運動への共鳴が広がる世界のなかに加わっていくことは難しいのではないだろうかという思いがあります。書評というよりは私の問題意識のほうへ流れてしまい、話のまとまりにかなり不安がありますが、以上にしたいと思います。恐れ入ります、ありがとうございました。